

別冊 おおいだものがたり

～資料館資料編～ ■「齋藤茂吉と山形の風景」展より

現在資料館では、「齋藤茂吉と山形の風景」展を開催中です。今回はこの中から、「螢火を一つ見いでて目(ま)守(も)りしがいざ帰りなむ老いの臥処(ふしど)に」の書をご紹介します。

この一首について、齋藤茂吉は次のように自解しています。「いよいよ夏が来た。まだ寝たり起きたりの状態にあるが、ある日の夜に、夕飯ののち、ひとり家を出て、田の畔のあひだを散歩した。すると、水につかって居る草藪のあひだに螢が一つ光ってゐる。ああいよいよ螢が出るやうになつた、さういふ一種悲哀に似た感慨を以てこの一首を作つたのであつた」(雑誌『読売評論』昭和25年7月号掲載)。

茂吉は大石田に転居して間もなく湿性肋膜炎に罹患しています。一時は予断を許さない状況にあったものの、夏頃には快方に向かいました。とはいえ衰えた体で出歩ける先はごく近所だったはず。この当時聴禽書屋の裏側は愛宕山の台地下まで田んぼが広がっており、現在の資料館正面付近には小川も流れていました。そのあたりで一匹の螢を見つけ、じっと見守った後で、さあ帰ろうと腰を上げる情景です。

この歌を単純に読み下せばこのような何気ない一コマとなります。特に「螢を見てから帰った」という過去の出来事として捉えると、ほんの少し外出して帰ってきただけとも読めます。しかしこれを現在進行の場面として捉えると、「目守りしが」から「いざ帰りなむ」に至るまでには意外と時間がかかっているのではないかと思います。

この時茂吉は、明滅する螢の光の中に自分自身を投影していたのかもしれませんが。一匹の螢の儂い光と小さく弱くなった生命力とが重なることで、その螢火と自らの命の灯をよりいっそう愛おしく感じているのです。『白き山』の「螢火」と題された連作の中には「わが生(いのち)おぼろおぼろと一とせの半(なかば)を過ぎてうら悲しかり」という一首も含まれています。「私の命はぼんやりと虚ろなものになった。そうしているうちに一年の半分も過ぎてしまったことは、なんということもなく悲しいものだ」という歌意です。それが「螢火を」の歌境で一匹の螢を静かに見つめる茂吉自身の姿なのです。

物思いに耽りながら実際に時間が経過していたのか、あるいは精神的な空白の中で忘我の境地にいたのか。その中でふと我に返り現実に引き戻されたことで、四句目では時間的な転換が生まれ、それまでに流れた時の長さを感じられるのではないのでしょうか。



大石田町公式アカウント開設

LINEはじめました

防災情報や各種行政情報を受け取ることができます。

友だち登録をお願いします！

登録方法

右の二次元コードを読み取って友だちに追加してください。

大石田町公式LINE

防災放送の内容を 電話で確認できます

防災放送が聞き取りにくい、放送内容を確認したい等のご意見をいただき、町では防災放送確認ダイヤルサービスを開始しました。

このダイヤルは定時(夕方6時のメロディ等)放送を含め、直近の放送から8時間以内の内容を順次聞くことができます。

確認ダイヤル：0237-48-8444

■総務課総務グループ TEL35-2111 (内線218)

町の人口 令和6年7月1日現在		
世帯数	2,234戸	(-2)
総人口	6,055人	(-5)
男	3,010人	(-2)
女	3,045人	(-3)
(6月中の異動)		
出生	0人	転入 7人
死亡	5人	転出 7人

※この人数は外国人も含めたものです。